瀬戸内海における地域構造に関する歴史的考察

代表　樋渡　彩（近畿大学工学部建築学科　講師）

[研究報告要旨]

本研究は、都市史の視点から瀬戸内海とその周辺地域を対象とし、歴史のなかで育まれてきた交流や経済的・文化的価値を再発見し、地域構造の再構築を試みるものである。

瀬戸内海は、古くから舟運による人々の往来や物資の運搬が活発に行われて、商業や産業の大動脈として役割を担ってきた。物資の荷揚げ荷下ろしや、潮待ちなどの寄港地は港町に発展し、華やかな都市文化を生み出した。しかし、戦後の自動車社会になると、陸路主体の地域構造に変化し、これまでの舟運を中心とした都市および集落は活気を失っていった。橋の架橋とともに舟運も激減し、多くの人が島から本島へ流出していった。ようやく近年になって、瀬戸内海の価値が見直され、瀬戸内芸術祭などの新しい動きが見られる。だが、実際には、個々が独立した小さなコミュニティにとどまっているのが現状である。

そこで、本来の地域構造、アイデンティティを呼び起こす手がかりとして、歴史的な視点から地域の枠組みを再構築することを試みる。

本研究では、まず瀬戸内海の航路を復元した。九州地方、中国地方、四国地方、近畿地方を結ぶ航路が発展し、1920 年代の頃が最も活発であったことが確認できた。そして、「地乗り」、「沖乗り」、機帆船時代の航路に沿って都市あるいは高密な集落の立地傾向が示された。芸予諸島では、高密な集落の多くが海側に位置し、海との密接な関係のなかで集落が形成されてきたことが浮かび上がった。また、愛媛県大島を例に産業とのかかわりのなかで集落が発展してきたことも把握した。さらに、肱川流域を例に、瀬戸内海と内陸部からなる地域構造を明らかにした。舟運、木材産業などの産業で成り立つ地域像を描きだすことができた。

こうした様々な規模の地域が舟運の発展とともに、経済・文化を育み、個性的な都市および集落を形成してきたのである。これから地域再生を考える上で、この視点に立って、地域の枠組みを捉え直し、歴史文化の蓄積を呼び起こすことが重要だろう。